

英語嫌い改善・英語力向上の取り組み --経過報告と今後の課題--

水野 知津子*

Consideration of Further Useful Method of English Teaching in Motivating and Promoting Students' Learning at National Institute of Technology, Kagawa College, Takuma Campus

Chizuko MIZUNO

Abstract

Various attempts have been made to develop students' English ability at the National Institute of Technology, Kagawa College, Takuma campus over the last decade. There have been several approaches implemented to improve students' English comprehension, including Computer Assisted Language Learning, Extensive Reading, Collaborative Learning and so on. There appeared to be some improvements in students' English ability when we looked at their GTEC test scores. Extensive reading seems to play an important role in developing students' ability. However, there must be more things to do to motivate and promote not only students' English learning but also students' humanity. This suggests a need for further study of English teaching and integration of development of personality, and a longer longitudinal evaluation.

Keywords: Humanity Development, Extensive Reading, Motivation, Teachers' Roles, Autonomous English Learning

1. 緒言

グローバル化した現代において、英語で世界中の人々と自由かつ対等にコミュニケーションできる能力は不可欠であり、理系の技術者も例外ではない。また、世界中の人々との共存において英語の運用能力だけでなく、人間性も磨いておく必要がある。香川高等専門学校での英語科での取り組みを振り返り、英語教師として何ができるのか、さらなる改善に何が必要か考えてみたい。

香川高専では英語嫌いや英語に苦手意識を持っている学生が多いが、様々な取り組みにより、状況は改善してきている(水野, 2016)。詫間キャンパスでの現状をみると、2013年4月に「うちの学生は英語が大嫌い

だ。」と言っていた専門教科の教員が、2016年1月には「英語が好きな学生が増えている。専門の科目のほうが苦手だという学生もおり、専門の教員として頑張らなければならない。」と話していた。外部試験 GTEC のスコアでも多少であるが英語力向上が見られる。(森, 2016)。

2. 香川高専での英語教育

2.1 取り組み

詫間キャンパスではコンピューターを利用した CALL 教育や、組立て作業をするときに日本語禁止で組立マニュアルの指示や質問等をすべて英語で行う「ものづくり」を利用した英会話授業などが実施されてきている(森・ジャンストン, 2013)。また、リーディング力だけでなく、英語力全般の向上に有益な多読(高瀬, 2014)

* 香川高等専門学校詫間キャンパス 一般教育科

を2年生の授業を中心に週1時間(45分)実施している。筆者の授業では昨年度から多読を取り入れ、多読のある程度の効果をアンケート結果から確認できた(水野, 2016)。

2.2 香川高専学生の英語嫌い意識調査

香川高専では英語嫌いの学生が多いと聞き、筆者の担当クラスでアンケート調査を行った。いずれも授業開始前、4月の最初の授業で実施した。筆者にとって指導するのがはじめての学生ばかりである。対象は2013年高松キャンパス209名(1, 2, 3年)、2014年詫間キャンパス284名(1, 3, 5年)、2015年詫間キャンパス116名(3年生)である。結果は、英語に対して否定的な回答がそれぞれ43%、45%、52%であった(表1参照)。



表1. 「英語は好きですか?」結果

英語に対して否定的な回答が予想以上に多かった。香川高専学生の英語嫌いが確認できた。高松キャンパスに比べ、詫間キャンパス学生の英語嫌いの比率は少し高いようであった。

2.3 筆者の取り組み

筆者の授業ではできるだけ英語を使用し、内容を理解した英文を使ってさまざまな音読をさせ、学生に英語を使うように指導している。簡単でも自分で英語を使い、自分の意見を表現する活動を入れている。将来社会で必須のコミュニケーション力をつけるため、ペアやグループ活動などの協働学習を多く取り入れている。授業の最後に振り返りをさせ、自分の理解度の確認と成長を実感できるように心がけている。昨年度からは3年生に多読を取り入れ、英語嫌い、苦手意識を改善するある程度の効果を確認することができた。

2.4 取り組みの結果

筆者の3年間の取り組みの結果は次の通りである。「英語が好きになった」と答えた学生は2013年高松キャンパス(アンケート回答者188名)は22%、2014年詫間キャンパス(同259名)は24%、2015年度詫間キャンパス(同116名)では28%であった。

3年間の取り組みの初年度から「英語が好きになった」と答えた学生がおり、「英語嫌い」は多少改善されたが、同時に「嫌いになった」という学生が出た。ペア活動を楽しめた学生や、自分の英語力の向上を実感できた学生が「英語好き」になっていた。しかし、自分の英語力向上を実感できず、ペア活動が嫌い・苦手な学生は「英語嫌い」になっている傾向があった(表2参照)。

「英語が好きになった」				
1)	22%	対象: 2013年	188名 高松キャンパス	
2)	24%	対象: 2014年	259名 (詫間キャンパス)	
3)	28%	対象: 2015年	116名 (詫間キャンパス)	
		好きになった	変化なし	嫌いになった
2013年	高松	22%	65%	13%
2014年	詫間	24%	69%	7%
2015年	詫間	28%	71%	1%

表2. 取り組み結果

「英語が嫌いになった」学生の数には2013年高松キャンパスが13%、2014年詫間キャンパスが7%、2015年詫間キャンパスが1%であった。大きく減った2015年は多読を導入した年であり、多読の一定の効果を示しているものと考えられる(水野, 2016)。

3. 外部試験結果と分析

3.1 外部試験結果

詫間キャンパスでの英語教育の取り組みの成果は2013年では外部試験(TOEIC、ACE BACE テスト)では確認できなかった(森・ジャンストン, 2013)が、2014年度のGTECでは1年、2年ともに4技能全体の合計平均が前年度同学年のスコアより向上した(水野, 2015)。

2015年度2回目の詫間キャンパスGTECの結果では1年生、2年生共に、前年度よりスコアが下がってしまった。3年生は全体としては前年度よりほぼ成績が伸びた。4年生は昨年度に続き、TOEICにおいて伸びがみられた(森, 2016)。5年生の外部試験データはない。

3.2 外部試験結果分析

筆者の担当した学年は昨年と同じく1年生、3年生、5年生である。1年生のスコアが下がった原因として考えられるのは前年度と指導方法が異なったことである。これは、同じ本文を繰り返す学習法を嫌がる学生がいたため教科書の進度を早めに進めるように変えてしまったことが主な理由である。しかし、これにより、前年度実施していたスピーチなどの自己表現活動ができなくなり、この影響があると考えられる。一方、3年生のスコアが上がった理由としては、音読活動等、英語をどんどん使わせる授業に加え、多読を導入した効果が出たと考えられる。英語嫌いも少なくなった。

読問キャンパス学生の英語力は全般的にリーディング力が弱い。Inputを増やす上でも多読の充実とさらなる指導法の改善が必要である。ライティングに関しては4技能の中でスコアが一番高い。1年生から3年生まで自由英作文をしっかりと指導している効果がスコアに示されている(森, 2016)。効果的な英語指導法を確認し、授業改善を続け、有益な指導法を貫くことの重要性を実感した。

4. 多読の「英語嫌い」改善への有効性

4.1 多読とは

多読の有効性がますます注目されている。多読は比較的やさしい英語の本を直読直解でどんどん読み、インプットを大きく増やすことができる(高瀬, 2014)。全員が同じ本を読むのではなく、各自が読みたいと思う本を選び、自分のペースで大量に読んでいくものであり(花元, 2014)、協働学習が苦手な学生にも適していると言える。

4.2 「英語嫌い」学生の多読への態度

筆者の3年間の「英語嫌い」改善の取り組みの結果から多読のある程度の有効性が確認された後、2015年4月の最初の授業で実施したアンケート結果を詳しく点検してみた。すると、多読と「英語嫌い」に興味深い関係が確認できた。英語が嫌いな学生ほど多読授業に肯定的態度を示していたのである。

4.3 アンケート結果からみる多読の有効性

このアンケートは「今まで受けた授業で良かったと思うのはどんな英語授業ですか」という質問である。回答欄は①文法訳読授業、②リスニングやコミュニケーション活動中心、③速読や読解授業、④書く、⑤多読、⑥その他、で「自由記述」の欄も設けた。2015年度4月の最初の授業で実施した「英語への態度」と共

に尋ねたアンケート調査の質問である。対象は3年生116名で、前年度2年生の時に多読の授業を経験している。筆者が担当するのは初めての学生である。

この3年生116名の53%が英語に否定的な態度を示していた。この否定的態度の内訳は、「かなり嫌い」18名、「嫌い」13名、「あまり好きではない」29名である。中立的態度「ふつう」は42名、「英語が好き」「英語がかなり好き」は14名であった。

英語に対する態度と多読に対する態度の関係を分析してみた(表3参照)。「今までで良かったと思う英語授業」で多読を選んでいた学生を「多読に対する肯定的態度」と定義する。「多読に対して肯定的」だったのは、「英語がかなり嫌い」61%(18名のうち11名)、「英語が嫌い」46%(13名中6名)、「英語があまり好きでない」45%(29名中13名)であった。「ふつう」では38%(42名中16名)、「かなり好き」「好き」は21%(14名中3名)であった。英語が好きな学生ほど多読以外の活動に興味を持っており、英語が苦手な学生ほど多読の授業

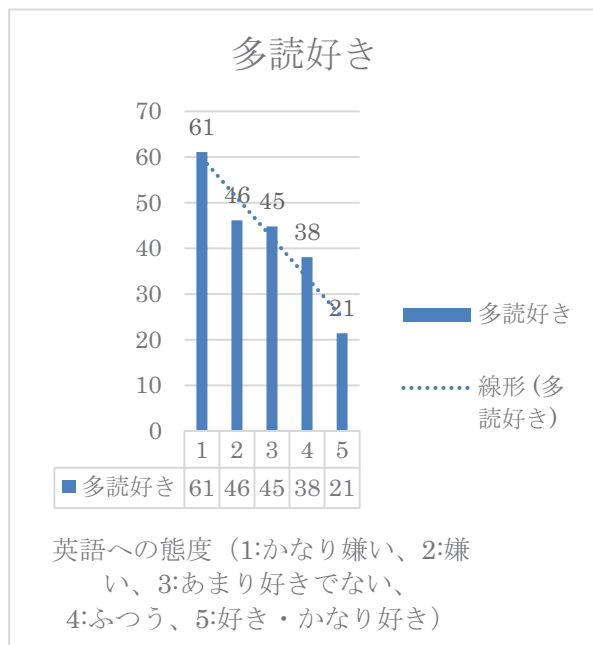


表3. 「英語嫌い」学生の多読への態度

を選んでいる傾向がみられた。「英語嫌い」学生の英語力向上に多読が大きな役割を果たしているのが確認できた。多読授業の継続と充実を考えていきたい。

5. 外部試験結果と学生の「多読・英語への態度」

5.1 外部試験結果

外部試験結果では全体として向上していたがどんな学生が向上していたのかを調べるため、学生の「多読・

英語への態度」ごとに個別のスコアを調査してみた。向上した学生のスコアの数値は1点差から最大では176点と大きな差があるが、前回試験との比較では「上がった」「下がった」と単純に分けて見ていった。

5.2 「多読肯定的態度」学生の外部試験結果

2015年度3年生の4月はじめに「多読に対して肯定的態度」だった学生のGTEC試験の結果を「英語への態度」ごとに比較してみた。「英語がかなり嫌い」学生11名中外部試験のスコアが伸びたのは6名で下がったのは3名であった。2名は前年度未受験でスコア比較ができない。「英語が嫌い」学生6名中4名のスコアが上がり、1名は同じ、1名は下がった。「あまり好きでない」学生13名中8名が上がり、5名が下がった。「ふつう」学生16名中8名が上がり、2名は前回未受験で比較できず、6名は下がった。「かなり好き」「好き」学生3名は3名全員のスコアが上がった。未受験者を除く、上がった学生の比率はそれぞれ67%、67%、62%、57%、100%である。多読を好み、英語が好きな学生がスコアを上げたが、英語がかなり嫌いな学生でもスコアを上げた学生が少ないとは言えなかった。

5.3 「英語への態度」と外部試験結果

「英語への態度」別で外部試験結果での伸びを単純に比較してみる。「英語がかなり嫌い」61% (18名中11名)、「嫌い」62% (13名中8名)、「あまり好きでない」59% (29名中17名)、「ふつう」62% (42名中26名)、「好き」「かなり好き」を合わせたグループでは71% (14名中10名)の学生のスコアに伸びが見られた。

「英語への態度」別に伸びたスコアの最大値と最小値を比較してみる。「かなり嫌い」18名中スコアが伸びた学生の最大値は176点、最小値は3点であった。「嫌い」グループでは最大値が131点、最小は11点である。「あまり好きでない」グループでは最大が69点、最小が2点である。「ふつう」では最大が109点、最小は16点である。「好き、かなり好き」では最大は104点、最小は24点である。4月はじめの「英語へ態度」による外部試験結果の大きな違いはないようであった。英語学習には様々な要因があり(竹内, 2010)、外部試験結果に直接関係するものは特にみつからなかった。

英語教育に必要なもの

6.1 英語教育の目的

英語教育では学生の英語力を向上させ、グローバル化に対応できる人材を育成することが求められているが、これが全てではない。世界中の多様な価値観をも

った人々と対等に自由に自分の意見を述べることが求められ、英語力だけでなく人間として人格も磨いておく必要がある。教育の目的とは人格の形成であり、これからの時代は知識、スキル、人間性を一体的に捉えることがもとめられる(西本, 2016)。

6.2 人格とは

人格とは高いモラルを持つことであり、人格があつてこそ知識、情報が活かされる。人格形成に役立つ教育が重要であり、必要である(津田, 2016)。

「モラル」とは善悪の判断を正しくできることをはじめ、自分を律し、社会や国家という「公」への奉仕の精神を持ち、真善美の理想を追求する精神をもっていることをさす。「教養がある」というのは、このような「高いモラル」、「人格」を備えていることを指す。(津田, 2016:43)

英語授業を通して英語力だけでなく、人格の形成にも役立つことが求められる。人格の始まりの源はその個人の外にあり、人格を創ることばは他者とのコミュニケーションから創発される(西本, 2016)。コミュニケーションが苦手な学生が多いが、嫌いだからと放っておく事は容易いが教育ではない。人格形成のためにも他者と関わる協働学習やコミュニケーション活動を続ける必要がある。

今後の英語授業

7.1 多読

多読授業で成果を上げるには一定の読書量が欠かせない。英語を苦手としている高専生がTOEIC平均400点に達するには、通常の英語授業に加えて、のべ90万語程度の読書量が必要であり、100万語以上を読破するとTOEIC平均は550点以上になる(西澤, 2015)。大学生を対象にした研究(高瀬, 2014)でも定期的な授業内多読時間を確保し、年間の総多読時間を増やすことが必要である(水野, 2015)。

7.2 教材

英文レベルの選択は重要である。多読では翻訳しないでさらさら楽しく読めるやさしい英文を読めるようにすることが大切であり(西澤, 2015)、多読以外の一般的な英語授業でも学習者の学力にあったレベルの教科書で指導することが重要である。学力よりレベルの高い教科書で指導すると効果が小さくなる(鈴木, 2016)。

また、学習者の心の成長にプラスとなる内容の教材が好ましい。

7.3 効果的な指導法

限られた時間で英語力、特に語彙力と読解力を向上させるにはラウンド制指導法が有益である。ラウンド制とは理解した英文を多様な方法で音声に重点を置きながら徹底的に繰り返し反復練習する指導法である(鈴木, 2016)。具体的には、内容理解活動におけるリスニングとリーディングの統合であり、3~4段階に基づき「聞く」「読む」活動を繰り返すことである(杉本, 2016)。

外部試験結果から香川高専詫間キャンパス学生の英語力向上にはリーディング力をつけることが重要である。リーディング力をつけるには内容理解力とスピードが必要であり、英文を語群単位で語順のまま速く理解する力が求められる。英文を瞬時に語群にわけ、語群の意味を瞬時に理解し、英文を瞬時に発音して意味を想起する力が必要となる。文法力、構文力、語彙力、背景知識、音読力が基礎になっており(鈴木, 2016)、これらの力が瞬時に役立ち、活用できるようにしておくことが必要である。繰り返しを嫌う学生がいるが、引き続きラウンド制を取り入れ、反復練習させ、学んだことをしっかり定着できるようにしていきたい。

7.4 教員の役割

教員の役割は大きく、教員には多くのものが求められる。常に学び、授業を改善し続ける必要がある(水野, 2014)。多読をより効果的にするには教員の役割が重要であり(高瀬, 2014) 努力が求められる。同僚性の問題や英語教員によって好みの指導法があるが、教員は与えられた授業ができるだけ有益となるよう改善し、それぞれの指導法の中で継続した工夫が求められる。

7. まとめ

英語苦手意識改善、英語力向上に多読は有効な指導法だということが理解でき、より効果がでるようさらに進めていきたい。ラウンド制も充実させ、授業の中で英語をどんどん使うようにさらに進めたい。

英語力だけでなく、人間力を高め、世界中の人々と自由にコミュニケーションを楽しみ、対等に議論できるようになって欲しい。日本を元気にし、元気になった日本から世界に貢献して欲しい。まずは自分の好み、主観だけでなく、客観的に物事を見る目を持つように心がけて欲しい。相手を尊重し、何事も公平、冷静に判断できるよう人格をさらに磨いて欲しい。英語教員

が学生の模範となるようこれらの努力を率先して続けていくのは言うまでもない。

参考文献

- 伊佐地 恒久(2010). 「日本人高校生英語学習者に対する [10 分間多読] の効果—読解力と読解ストラテジーの認識について—」『英語授業研究会紀要』. 第 19 号, pp.4-15.
- 泉恵美子・加賀田哲也・松下信之 (2014). 「スローラーナーの英語指導をどうするか?」, 関西英語教育学会 (KELES) 2014 年度 (第 19 回) 研究大会企画ワークショップ資料.
- 花元 宏城 (2014). 「英語 I・II・III・IV 楽しく読む Enjoy Reading.」 東京電機大学理工学部英語教材資料.
- 水野 知津子.(2014). 「英語教師に求められるもの—外国語学習法略の動機付け観点からの考察—」『香川高等専門学校紀要』 第 5 号, pp.89-98.
- 水野 知津子.(2015). 「香川高専学生の英語苦手改善・英語力向上への試み—多読を考える—」『香川高等専門学校紀要』 第 6 号, pp.81-86.
- 水野 知津子.(2016). 「香川高専学生の英語苦手改善・英語力向上への試み—多読の有効性を考える—」『関西英語教育学会紀要』 第 39 号, pp.57-67.
- 森 和憲 ジャンストン・ロバート.(20013). 「香川高等専門学校詫間キャンパスにおける英語教育の現状と課題」『香川高等専門学校紀要』 第 3 号, pp.101-108.
- 森 和憲.(2016) 「香川高専詫間キャンパス英語外部試験結果」 校内資料
- 西本 有逸.(2016). 「これで良いのか英語コミュニケーション!」 外国語教育メディア学会関西支部中学高校授業研究部会、英語の教え方研究会、より良い英語教育を考える会共催「第 22 回中学高校教員のための英語教育セミナー」発表資料.
- 西澤 一.(2015). 「多読プログラムの成否要因と実践上の工夫」. 関西多読新人セミナー発表資料.
- 杉本 義美.(2016). 「これで良いのか教科書本文指導! ~技能統合と生徒主体の学習を~」 外国語教育メディア学会関西支部中学高校授業研究部会、英語の教え方研究会、より良い英語教育を考える会共催「第 22 回中学高校教員のための英語教育セミナー」 発表資料.
- 鈴木 寿一.(2016). 「これで良いのか入試対策授業」 外国語教育メディア学会関西支部中学高校授業研究部会、英語の教え方研究会、より良い英語

教育を考える会共催「第 22 回中学高校教員のための英語教育セミナー」発表資料.

高瀬 敦子 (2014). 「早めの多読・多聴で大きな効果」.
英語授業研究会関西支部・230 回例会発表資料.

高瀬 敦子 (2015). What is Extensive Reading? Needs of ER, ER Materials, Effective Ways to Succeed ER (多読の必要性・多読図書・効果的多読方法). 関西多読セミナー発表資料.

竹内 理(2010). 『より良い外国語学習法を求めて』東京：松柏社

津田 幸男.(2016). 「人格形成のための教育：私の実践」筑波フォーラム 79 号 pp.43-44.

<http://www.tsukuba.ac.jp/public/booklets/forum79/11.pdf>, retrieved on March 17, 2016.